

r  
y  
|  
クソカスホスト86 | R e v e r s i b l e  
S  
t  
o

## 目次

プロローグ	……………	3 ページ
第一話	……………	4 ページ
第二話	……………	14 ページ
第三話	……………	20 ページ
第四話	……………	32 ページ
第五話	……………	44 ページ
エピローグ&おまけ「めうの博士観察記録」	……………	74 ページ

## プロローグ

この国で一番有名なホストを知っているだろうか。ホストクラブやキャバクラが密集した治安の悪いとある街で、常に高い売り上げを誇る四人のホストがいる。数多の女達を虜にし、金も心も全てを貪り食う彼らには、表と裏がある。

——これはそんな彼らの、物語。

## 第一話

俺はホストクラブ「Compass」のNo. 6。この店に勤めて6年のベテラン……のはずだ。俺は数年前までNo. 3で、大人気ホストだったはずなんだ。

……あいつらが来るまでは。

突然この店に四人の男がやってきた。十文字アタリ、マルコス、サーティーン、零夜。ちょうど三人くらい一斉に辞めた時期だったから、四人同時に入ってきたことに ついては特に違和感を持たなかった。しかしあまりにも、奴らは容姿が端麗すぎた。仕事もすぐ覚え、手に取るように客達の心を掴み、マルコスに至ってはたった数週間でNo. 1となり、他の三人も続いてあつという間にトップ4を独占した。俺の客がみるみるうちに減っていき、全員あいつらの虜にされた。俺の方が先輩だったのにあいつらの方が店長に大事にされ、俺の立場はどんどん危うくなっていった。せつかく新しい客を捕まえても全部あいつらに盗られていく。

許せない。もうこれ以上は耐えられない。ただ泣き寝入りするなんてそんなのは嫌だ。

少し、わからせてやろうか。

俺より随分と歳下のくせに調子に乗った罰を受けさせてやる。

だが四人一気には難しいし、あまり事を荒立てるのもよくない。あれでもかなり有名だからな、あいつら。まずは一人か。

マルコスと零夜は見ていればわかるが頭が良さそうだ。サーティーンが一番隙がありそうだが、近づくのは危険だと感じる。

——十文字アタリはどうだ？

あいつは見た目が幼くてほんとに二十歳か？　つてくらいだし、性格もまさに純粹って感じだ。持つてる鞆にカー〇イのストラップとかつけてたし、中身が餓鬼なのは間違いない。メンタルも相応だろう。少し脅せば形勢逆転できるかもしれないな。

「シャンパン入りまーす！」

その声を聞き、俺はニヤリと笑った。

「おっと」

「っ！」

パシャ！ と持っていたグラスから酒が溢れ、アタリの服にかかる。赤い色がシャツに染み込み、じわりと広がっていった。

「アタリくんごめん！ 大丈夫!？」

白々しく謝ると、一瞬……彼の周りの空気が変わったような気がしたが、

「……大丈夫だぜ！」

すぐに彼らしくパツと笑った。アタリは客に着替えてくる旨を伝えると、更衣室に向かった。俺も掃除道具と溢した酒をとりに行くフリをして後を追う。

あいつの周りには常にあの怖そうな三人がいて、二人きりになれるチャンスなどない。こうする事では、俺はあいつに近づけない。もどかしい、最初は逆だったはずだ。餓鬼みたいな見た目のくせにちよつと稼げるようになったからって偉そうにしやがって。

後悔させてやる。

俺はポケットからスマホを取り出し、録音機能をオンにする。一人になる時というのは少なからず本音が漏れるものだ。これで女達がドン引きするようなネタを……

「っ……っ！」

「うわー、びちゃびちゃだ。クリーニング出さねーとな……」

更衣室を覗くと、アタリが着替えていた。上着を脱ぎ、シャツのボタンを外す姿に目を奪われる。

ああ、なんて……

瞬間。突然バチッ！！と音がし、更衣室の電気が消えた。何だ、停電！？ブレーカーが落ちた……？こんな事初めてだが……と動揺していると、バタツと音がした。復旧したのか電気がつき、見ると……アタリが倒れていた。

「あ、アタリくん！？大丈夫！？」

急いで駆けつけしゃがみ込み、彼の肩を揺さぶるが……起きない。どうする……！！  
？ No. 2の彼が倒れたとなれば大騒ぎだ。

俺は焦った。焦った、はずだが。体は動かなかった。

脱げたシャツから、彼の肩見えていた。同じ男とは思えない毛一つない綺麗で健康的な肌で、ごくりと生唾を飲み込む。すぐに誰かを呼ばないといけない、そんなことはわかってる、わかっているのに。

こんな俺が、彼に近づけるチャンスは今しかないのだ。

欲望に負け、指先で肌をなぞり……そつと肩に口付ける。

「へー。やっぱそうなんだな」

「!？」

声が聴こえ飛び退くと、アタリがゆっくり起き上がった。な、何で……揺さぶつても起きなかったのに!

「目の前で気絶してるのに助けも呼ばずにセクハラするとか……この変態!」

「ち、違う! 俺はっ……!!」

言い訳しようとした口がきゅつと結ばれる。後ろから、ただならぬ殺気を感じたのだ。

「何を、しているんだい」

NO. 3の零夜だ。背筋も凍るような殺気が、俺の身も心も恐怖で支配する。アタリは零夜の方に駆け寄って行くと、甘えるように抱きついた。

「零夜っ」

「お兄ちゃん、だろう?」

「れ、零夜兄ちゃんっ、この人がオレにいやらしい事しようとしたんだ……!」

「だから違うっ! あれはっ!」



不可抗力だ。あんな美しいものを見たら誰だつて手が出る。そんなのは言い訳にならなかった。

ああ、そうだ。悔しいが俺はアタリみたいな子がタイプだ、どタイプだ。だから手を出してしまったんだ。

「へえ、それはいけないね。君は確かこの店で六番目に人気だったはずだけれど……」

「あ……」

「さて、どうしようか？」

零夜がアタリを抱き寄せ、意地悪くニヤリと笑う。こいつ、こんな顔、するのか

……

「お、俺はっ!! 悪くないっ!!」

堪らず、俺は逃げ出した。浅はかな行動で自分のホスト人生を終わらせてしまったことに、後悔の念を抱きながら。

全く。身の程を弁えないからこうなるんだ。何をしようとしてアタリをここへ誘き寄せたかは知らないけれど。

僕は男が落としていったスマホを拾い上げる。見ると、録音機能がオンになっていた。

なるほどね……弱みを握ろうとしたのか。やれやれ、愚者が考えそうなことだ。アタリに一応テレパシーを送って正解だった。おかげで逆に弱みを握ることに成功したわけだが……あんな奴を脅して得られるものの方が少ないだろう。普通に告発して店から追い出した後絶望させて存在を抹消しようか。

スマホの録音を消しその辺に置くと、ぐいと胸ぐらを掴まれた。

「どうしたんだいアタリ、お兄ちゃんが来て安心したのかい？」

「お前次それ言ったら目ん玉焼くからな」

ああっ、素晴らしい……先程までは演じていたから光があつたけれど、今の彼の目は濁っている。いつものアタリだ。光など一筋も差さない深海の奥底のような冷たい目……堪らない……

「興奮してんじやねーよマゾが」

「してないさ、興奮なんて。それに仕方ないだろう？ 僕とサーティーンは接客でしかキャラ作りをしていないけれど、君とマルコスは接客以外でもしているのだから」  
「チッ、性格わりーな」

アタリは乱暴に僕を放すと、着替えを再開した。後ろから抱きしめ、あいつが触れた箇所を噛み付くようにキスする。

「っ、やめろ、仕事中だぞ」

「上書きしなければいけないだろう？」

わざと痕をつける。そう、この子は僕達のもの……こんなものつけなくてもその事実は揺らがないけれど、愚者達は見えるものがないとわからないからね。

「帰ったらマルコスとサーティーンにもしてもらうんだよ」

「うるせーな、わかってるっつーの」

よし、満足だ。やるべきことは終わった。後ろから抱きしめているのはそのままに手を伸ばし、シャツのボタンをつけてあげる。

「それで？ 彼はどうするんだい？」

「おもしろそーだからしばらく泳がせる。飽きたら記憶消そうぜ」

「それだけかい？ 君ともあろうものが、随分緩いじゃないか」

「辞められたらあいつの分の客がオレらのところに流れてくるだろう」

「……ああ」

憎悪ですつかり抜けていた、流石アタリだ。よく考えている。不快な存在だと思つたらすぐ消してしまふ僕とは違う。

やはり、僕達のボスなんだ。

「明日は久々の休日だし、アレの日でもある。さっさとこの大変な……いや、クソみたいな仕事を終わらせよう」

「言い直す意味あったか？ ……そーだな、アレの日だった。よっし、そっこー終わらせるか」

そう。明日は僕達にとって重要な儀式を行う日だ。その為にもう少し、クソ客の相手をしよあげようか。

クソカスホスト86 | Reversible Story |

発行者・文・黒幸あや

表紙イラスト・あまね るい

印刷所・製本直送com.

連絡先・@kurokuro | happy5

※無断転・複写・複製、オークションやフリマへの出品を禁じます。

※この作品は二次創作です。公式とは一切関係ありません。

※この本を処分する際は必ず切り刻むか燃やしてください。